

地産地売買地消

柞刈湯葉

Yuba Isukari

WIRED
sci-fi
サイファイプロトタイピング研究所

© Condé Nast Japan

世界は幅5キロ、長さ30キロの長方形をしていた。

海風がいつも吹き付ける沿岸都市だった。ここで育った子供たちは皆、砂浜で貝殻を集めて砂山を作り、海岸沿いに並ぶ養殖場と、水平線の向こうに青く霞んでいる風車群を見ながら育っていった。

それが世界の全てでないと思ったのは、鼠^{ねずみ}が9歳のときだった。両親が離婚して、母が自分の生まれた町へと帰ってしまったからだった。そしてその時にはじめて、この少年は自分の暮らす「世界」が、浜風市^{はまかぜ}と呼ばれる人口40万の都市だと知った。本当の世界はもっと遥かに広く、鼠の育った町は、世界中に幾千と存在する都市のひとつに過ぎなかった。

母のことを考える時、鼠はいつもその顔や声よりも、匂いのことを頭に浮かべた。

どこに行くときにも、きちんと化粧をする人だった。それはこの浜風市では珍しいことだった。化粧品というものがそもそもあまり流通していないからだ。

母の仕事はH-mall^{ハマ・モール}での鮮魚販売だった。海沿いの町ということもあって、魚はいつも市民の主要なタンパク源だった。だから母の手はいつも、化粧品と魚の交じり合った不思議な匂いがしていた。毎朝学校に行く前に、母はその手で鼠を抱きしめて、「行ってらっしゃい」と言っていた。

そんな母がある日、小さなキャリーバッグに荷物をまとめて、玄関から消えていった。まだ秋口なのに冬物のコートを着て、鼠の頬にキスをしてこう言った。「お父さんや先生や、店長さんの言うことをよく聞いて、いい子でいるのよ」

鼠にはその言葉の意味がわからなかった。自分はいいい子じゃなかったのだろうか。だからその罰として、母がいなくなってしまうのか、と。

翌朝も母の「行ってらっしゃい」は続いた。画面越しの人になっても、母は何事もなかったかのように、^{バーチャル}V空間越しに息子の成長を見守ってくれていた。ただ、あの不思議な匂いだけが部屋から消えていた。その匂いがもう戻ってこないことを理解するには、9歳の脳はあまりに未熟だった。

「ママは潮の臭いが嫌いだった。だからこの町を出ていったんだ」

母が家からいなくなると、父はしばらく塞ぎ込んで、鼠にそんなことを言うようになった。嘘をついているのはすぐにわかった。潮の臭いが嫌いなのは父のほうだった。父はH-mallの農業生産部門に勤めていて、内陸側にある畑と温室で、一日の大部分を過ごし、家に帰ると溶けるように眠ってしまった。

市内で消費される野菜と果物を、過不足なく生産するのが父の仕事だった。市の農園では、トマトから大根、リンゴからバナナに至るまで、あらゆる作物が栽培されていた。狭い空間にこれだけ多くの種類を育てられるのは、その土地の土壌や気候に合わせて遺伝子を設計し、組み込まれた品種が使われているからだ。ゲノム編集技術の発達で、そうしたオーダーメイドの品種を可能にしていた。

とはいえ、農作物である以上、すべて計算どおりにはいかない。その日、父はその年の収穫量が予定を下回ったことを H-mall の店長に報告しなければならなかった。店長は「野菜は天候次第だから」で済ませてくれたが、父はそれを自分の責任として抱え込んでしまう人だった。

そういうわけで、父は家に帰るなり、

「おおい、買い物に行くなら、何か菓子を買ってきてくれ」

と鼠に頼んだ。アルコールを受け付けられない体質の父は、何かつらいことがあるたびに甘いものを望んだ。鼠は学校のかばんを机に置いて、H-mall の最寄り店に向かった。市内には数十の支店があり、どこに住んでいても歩いていける距離にあった。というよりも、支店の場所に合わせて住宅地の区画が決まっていた。

まず菓子のコーナーに向かった。カウンターに腰掛けたおばさんに挨拶をすると、あらいらっしゃい、とおばさんはタブレット端末をぼちぼちと触り、

「今年は小麦が少ないから、米をもっと食べてほしいのよ。君のお父さんはこのところビタミン B 不足だから、きな粉団子にするといいわ。農業部門の人は体力を使うから、このくらいカロリーをとっても問題ないわね。はい」

と言って紙袋を渡した。

「1本はおまけよ。お父さんには内緒にしてね」

と言っておばさんは笑った。鼠が自分のタブレット端末からポイントを支払い、次のコーナーに向かった。こうして町の人からお菓子をもらえるので、鼠は父の不機嫌をむしろ望んでいた。

米、お茶、箱ティッシュ、髭剃り、靴下、風邪薬、といったものを受け取った。どれも H-mall のロゴマークである風車の意匠が印刷されていた。海の向こうにそびえる風車のエネルギーで、生活に必要なものを全て揃えられる都市を、店長たちが数十年かけて作り上げた成果だった。

子供の手には持ちきれない量になったので、電動キャリーワゴンを1台借りた。小さめの風呂桶に車輪を付けたような機械で、鼠の後ろをのろのろと付いてきた。このキャリーワゴンも市内で製造されたものだ。V空間で流通しているデータをもとに、3Dプリンタで出力、組み立てられたものだった。連れて家まで帰ると、後は空になった桶が勝手に店まで帰っていった。

鼠はこうしたお使いを、文句ひとつ言わずにこなした。きちんと家の手伝いをする「いい子」であれば、母が家に帰ってくると思っていたからだ。でも、何度買い物をして、どれだけの荷物を家まで運んでも、母はずっと端末の画面に表示されるだけの人だった。

「お母さんの町では、こういう機械がひとりで家まで来たんだけど、浜風市の人たちは、お客さんが店に来るようにしているのよ。ちゃんとお客さんと店員さんが顔を合わせるほうが、いい町を作れるって、店長さんがそう決めたの。いいことだと思うわ」

母はそう言っていた。実際、母の町のようなシステムだったら、お菓子をこっそり融通してもらうなんてことはできなかつただろう。それは確かに、いいことだ。

でも、と鼠はいつも思った。そんなにいい町なら、どうして母さんは帰ってきしてくれないのだろう。町の米と大豆で作られたきな粉団子を食べながら、鼠はもう戻ってこない母の匂いに思いを馳せた。

そうしているうちに少しずつ背が伸びて、父の背丈を追い越す頃に、鼠はようやく気づいた。

「いい子」であれば母が帰ってくるわけではない、と。

こうして鼠は「いい子」であることをやめた。

-2-

「^{はやぶさ}隼！ 隼！ 隼！」

動体視力で捉えられないほどの速度で、レーシングカーが町を駆け抜けていく。街路樹が風圧でがさがさと揺れ、道路脇に並んだ市民たちが、遠ざかっていく車へと歓声を上げる。時速はゆうに 300 キロを超えていた。

もちろん現実の市街地でそんな速度は許されない。浜風市を移動するモビリティは全て、時速 50 キロが上限と決められていた。小さな都市の自給自足を支えるには十分な速度だ。それでもスピードを求めるのは人間の^{きが}性であるらしく、V 空間のカーレースは世界中から注目される人気競技だった。

特にこの「24 時間耐久 V レース」は、世界各地数百の都市を V 空間内で繋いだ数千キロのコースを、各都市の代表選手が丸一日かけて走り抜けるという、年に 2 回行われる一大イベントだった。建物の立ち並ぶ迷路のようなコースと、ランダムに現れる障害ギミックから、瞬時に最適な経路を見つけ出し、巧みな運転スキルで走り抜ける。その集中力を 24 時間維持する。人間の脳の限界に迫る、常軌を逸したレースだった。

現実世界にこれといった娯楽のない浜風市民たちも、見慣れた町が一大競技場に変身するとなると、興奮しない者は稀だった。ましてやトップを争うのが自分たちの代表となれば尚更だ。V空間内の壁という壁には、地元のヒーローである「隼」の-avatarが表示されている。黒褐色のレーシングスーツには羽毛を思わせるテクスチャが貼られ、頭部はそのまま鳥の頭だった。彼（彼女）の素顔を知る者は市内でもごく少数しかいないが、隼が最速のレーサーであることは、市民の誰もが知っていた。

「横殴りの風がすさまじい勢いで押し寄せます。浜風市は風力で支えられている町ですので、それをギミックとして導入しているようですね。ああと、先頭集団がクラッシュ！ コースから離脱したレーサーはチェックポイントからやり直しです。おっと、ここで間を抜けて、地元選手の隼がトップへと躍り出たッ！」

実況の叫び声とともに、空から隼のいる場所に直接スポットライトが当たった。V空間ならでの演出だ。ちょうど隼は H-mall の本店を通過しており、建物の背後に巨大な影ができた。

その影の真ん中に、17歳になった鼠が立っていた。

「早いとこ取引を済ませよう。皆の目がレースに向いてる間にな」

目の前にいるのは彼の「客」だった。V空間での外見は20代くらいの背の高い若者だが、これは若い頃に3Dスキャンした自分の体を、そのまま-avatarとして使っているせいだった。実物は中年太りの腹を抱えた45歳の男であることを鼠は知っている。

「市内で生産していない、度数20%以上の蒸留酒。10日以内で銘柄問わず。1瓶あたり400H^{ハマ}ポイント。いいな？」

「ざけんな。先月は500だったろ」

「ふざけてるのはお前だ。先月お前が持ってきた瓶、焼酎って言ってたが、バイオエタノールで嵩^{かさ}増しされてたぞ。買ってやるだけでありがたいと思えよ？」

鼠はVRマイクが拾わないように、小さくチツと舌を鳴らした。酔っ払いに酒の区別はつかないと思い、父の農場から拝借したエタノールで調整したのだが、わざわざ密売人に酒を頼むような男だけに、相応の舌を持っているようだった。

「はい、ここで H-mall 店長からコメントが届いています！『隼はわが浜風市の誇りです。この町を支える海風のように、Vレースを駆け抜けてくれると信じています』。ありがとうございます！ さて、先頭集団はすでに浜風市を通過し、次の水守市^{みずもり}へと向かっています。ここは激しい濁流を駆け上がるコースとのことです。……」

実況の声とともにスポットライトが消え、周囲が急に明るくなった。

「悪かった悪かった。3本きりじゃ悪いと思って、サービスで4本にしたんだけどな。じゃ450にするよ。あんたも他から手に入れる当てなんてないんだろ？」

となだめる鼠の背後に、警察の格好をしたアバターが数人、一斉にこちらに向かってきた。

「アルコール飲料の輸入は条例で禁止されています！ 待ちなさい！」

「くそっ、もう来たのかよ！」

すぐにV空間からログアウトして、頭にかぶったゴーグルを外した。顔に滲んだ汗を袖で拭いて、ふう、と一息ついた。それからタブレット端末を見ると、新着メッセージが1件あった。店長からの呼び出しだった。

-3-

H-mall 本店の店長執務室は、人口40万の浜風市の頂点というには似つかわしくない、町工場の事務所のような部屋だった。革の破れたソファに腰掛けた店長が、入ってきた鼠をじっと睨んだ。

「許可なく市外のものを持ってはならないと、何度も言いましたよね？」

鼠は黙って目を逸らした。壁にはV空間で拳と握手する店長の写真が飾られている。店長も他の市民の例に漏れず、若い頃に3Dスキャンしたアバターを使い続けている。比べてみると、目の前にいる女性は顔全体に深い皺が刻まれ、還暦を過ぎたばかりという実年齢よりも相当に老けて見える。H-mall 店長、すなわち浜風市の実質的な市長という立場が、相当なストレスになっているのが窺えた。「あなたが市外にいるお母さんから、いろいろなものを送ってもらっているのは知っています。でも、それは家族と離れ離れになった子供を慰めるために、例外として認めているんですよ。それを商売に使うなんて、とんでもないことだと思いませんか？」

「はい。おかげさまで高く売れます」

鼠は顔をぼりぼりと掻きながら答えた。長時間V空間にアクセスしていたせいで、目のまわりが赤く変色していた。ゴーグルの接触面が肌に合わないのかもしれない。帰りにH-mall 工業部門に寄ってみよう、と鼠は思った。小さな町であらゆる物資が生産されているので、生産者に直接アクセスすることができた。

「あのね、私たちはなにも、あなたたち市民に意地悪をしたくて、こんなルールを決めてるわけじゃないのよ」

「そうなんですか。ぜんぜん知りませんでした」

「あなたたち若者は知らないでしょうけれど、私が生まれた頃はね……」

年寄りの長話が始まるな、と思って鼠は集中力を OFF にした。机には胃薬の瓶が置かれていた。これも浜風市の自家製だったが、ずいぶん中身が減っている。専門的な医薬品であればさすがに輸入が必要だが、胃薬程度であれば H-mall バイオ部門で培養されている遺伝子組み換えの大腸菌が合成してくれる。そういう菌株のゲノム情報が V 空間で流通している。

「……で、地球の裏側で作ったような野菜や機械を、わざわざ船に乗せて運んでいたのよ。そのせいで有害なガスがたくさん出し、利益も一部の人がひとりじめにしていたの」

「あーはい。そうですね。大変な時代だったんですね」

「ええ。でも今は技術が進歩して、ゲノム設計農業や 3D プリンタ工業で、必要なものが必要だけ作れるようになったのよ。だから、地元でほしいものを作って、みんなが必要だけ分け合ったほうが、みんな豊かで幸せになれるのよ」

「えーと、俺の親父はいつも、野菜が予定どおりに収穫できなかった、って落ち込んでますけど」

「あなたのお父さんは真面目すぎるんですよ。もちろん何か足りなくなることはあるけれど、そういうのは食べる側で融通が利くんです。パンが足りない年はお米を食べればいい。みんな町のために自覚をもって取り組んでいるから、何も問題はないんです」

「でも、現実に俺の商売に客はいるわけですし、やっぱり必要なものはあるんじゃないですか？」

「もちろん、私たちが把握できない必要なものはまだまだありますよ。だから、あなたたちがこれから勉強して、社会に出て、そういう問題をみんなと話し合っ

て解決していくんです。いま勝手にやっていいことじゃありません」

といった具合でお説教は 15 分ほど続いた。店長が経理部門の部長から呼び出され、鼠はようやく解放された。

実際のところ店長も、未成年のささやかな商売を本気で取り締まるつもりはないようだった。立場上彼のような者を取り締まらなければ、他の市民に示しがつかないだけだった。

体感から言っても、鼠の商売は町に必要だった。少なくない市民が、地元産だけで回していく社会を息苦しく思っていた。生活必需品に不足しないと言っても、ちょっと娯楽性や嗜好性の高いものはなかなか回ってこない。「そういうのは V 空間でやりなさい」というのが真面目な大人たちの口癖だが、皆がそんな真面目に生きられるわけではない。

母が使っていたような化粧品も、今になって思うと、どこか他の町から手に入れたのかもしれないな、と鼠はしんみりと思った。

タブレットを見ると、新着メッセージが2件入っていた。1件は母からだった。
「頼まれていたウイスキー瓶、4本手に入ったから送るね」

とあった。その取引は店長の介入で中断されてしまったが、1か月も黙っていればほとぼりも冷めるだろう。家に保管しておけばいずれ捌ける。問題ない。

それにしても、母の住む水守市では、こういうアルコールは普通に流通しているのだろうか。だとすれば、ここよりはかなり住みよい場所なのかもしれない。

……結局のところ、母が出て行ってしまったのは、この町の文化に馴染めなかったせいなのだろう。自分のせいでもなく、父のせいでもない。もちろん潮の臭いのせいでもない。18歳になれば転居ができるので、向こうに引っ越すのも手かもしれない。かつてV空間で父と出会い、浜風市に引っ越してきた母のように。

もう1件のメッセージを開いた。また品物調達の依頼で、新規の顧客だった。連絡先のアイコンを見て、鼠は目を見開いた。

「おいおい、今をときめくレーザー様から、じゃねえか」

そこに表示されていたのは、市民の誰もが知っており、そこかしこの壁にポスターが貼られている、あまりにも見慣れた鳥頭だった。

-4-

「よっ、お前が『隼』か。1人なのか？」

玄関が開くなり鼠はそう尋ねた。現実世界の「隼」は、当然ながら鳥頭の人間ではなかった。鼠と同じ、まだ成長期の雰囲気を残す少年の顔をしていた。背後には簡素なワンルームの部屋があり、他に人の気配はない。

「どういう意味？」

市を代表するVレーザーという印象に反して、不安げなおどおどとした声だった。部屋は質素なワンルームで、鼠が父と暮らす部屋よりも狭い。あれだけ有名だからよほど裕福なのだろう、という鼠の予想は早くも外れた。

「本当は複数人のチームなんじゃないか、って思ってたぜ。あんなレースで24時間も集中できるわけねえだろ。VRゴーグルをいじって、V空間のアカウントをシェアしてるんだ、隣町にはそういう技術があるらしい、ってな」

「……考えたこともなかった。よくそんなこと思いついたね」

「俺の客はみんなそういうやつらだぜ。真面目だなお前。あっそうだ、ウイスキー買わないか？」

「え、何？」

「ウ・イ・ス・キー。知ってるか？ ちょっと訳あって余らしちまってんだよ。特別に1本600ポイントでいいぜ」

「いや、僕、19だから……」

「俺の2つ上か。年下かと思ってたぜ。あれ、家がこのへんってことは、同じ学校に通ってたんじゃないか？ 見覚えねえけど」

「行ってない、学校」

「ふーん、なんで？ 俺も行った行かなかったりだけ」

「運転、しか、できないから」

なるほどな、と鼠は周囲を見回した。少なくとも生活力のなさは、部屋を一瞥するだけでわかる。脱ぎ散らかした服や、空になったジュース瓶がそこら中に転がっていて、壁にはなんの目的かわからない布製の塔が見える。V空間を仕事にする者は現実世界の扱いがおろそかになる傾向があるが、これはその典型だ。

その時、部屋の隅にあるウォークイン・クローゼットのわずかに開いたドアから、リュックサックくらいの黒い物体がヌッと飛び出して、鼠の前を横切った。

「うわっ」

と声を上げた瞬間には、その物体はもう部屋の反対側の隅で小さく丸くなっていた。

「これ、猫!？」

「そうだよ」

「マジの猫か。すげえー。現実で初めて見たよ。へー、こんなフサフサしてんのか。名前なんてんだ？ オスメスどっち？ あっ、こいつ噛むのか？」

「触らないほうがいいよ」

伸ばした鼠の手を、隼はサッと遮った。目の前の不安げな少年が、確かにV空間のトップレーサーであることを思わせる反射神経だった。

「そいつ今、病気なんだよ」

「え、猫も病気になるのか？」

「そりゃそうだよ、動物なんだから。知らなかったの？」

「知らねー」

隼がため息をつく間にも、鼠は言葉を続けた。

「あ、でも猫豆知識なら結構あるぜ。黒猫に横切られたら不吉の予兆、ってやつ。今さっき思いっきり横切られたから俺ヤバいかもな。あと店長から聞いたんだけど、昔あった運送会社に……」

隼はその言葉を無視して、タブレットを取り出して、データを1件鼠に送った。

「ほら、これだよ。依頼の品物」

「お、何だ？ すげえー、知らねえ言葉がいっぱい載ってる」

渡されたのは処方箋の書類だった。いくつかの医薬品の名前と、聞いたこともない都市の名前が書かれている。

「この町の獣医は家畜しか診たことないから、V空間越しで、猫を飼っている獣医に診てもらったんだよ。それで必要な医薬品のリストを送ってもらった。それを手に入れてほしいんだ」

「あー、OKOK。なるほどね。けどさ、そういう理由なら、店長に言えば輸入手続きをとってくれるんじゃないかねえのか？ 医薬品は正規の輸入ができるはずだぜ、確か。どうせ金は余ってんだろ？ だよな？」

V空間の世界トップレーサーだからそうに違いない、と鼠は思っていたが、部屋を見るとどうもその印象が揺らぎつつあった。

「店長には、言ってない。言えない」

「なんで？」

「このアパートの契約書見たら、猫飼うの、禁止らしくって……」

「お前、本ッ当に真面目なんだな！」

鼠は床に転げて笑い出した。隼は軽蔑と後悔の混じった目で、しばらく鼠を見下ろした。

「猫の医薬品かよ。さすがに聞いたことねえし、手に入るかわかんねえけどよ。ちょっと向こうの仲介人に聞いてみるから、待ってろ」

そう言って鼠は寝転がったままタブレットの連絡先を開き、母のアカウントを選び、そこにメッセージを入力し……そこで、ふと違和感に気づいた。

最新ログイン時刻が、「2日前」となっていた。

そういえば、毎朝「おはよう」というメッセージを送ってくるはずの母が、このところは用事がない限り特に返事もしなかったのだが、今朝はそれがなかった。母は浜風市を去ってからの8年間、ただの1日たりとも、息子への連絡を欠かしたことがなかったのだ。

どう考えてもそれは、不吉な予兆だった。黒猫は部屋の隅で、鼠のほうをじっと見ていた。

「母さん、何かあった？」

とメッセージを送った。すぐにログイン状態の緑色マークが灯り、その次の瞬間にメッセージが届いた。

「はじめまして、鼠くん」

ぞわっ、と気持ちの悪い感覚が全身を駆け巡った。見覚えのある母のアイコンから、明らかに母とは違う誰かの言葉が送られてきていた。

「君のお母さんのアカウントを、少しシェアさせていただいている。話したいことがあるので、V空間の指定の場所まで来てほしい。2時間以内に」

「君が浜風市の『鼠』くんか」

黒スーツに黒ネクタイの男がそこに座って、3D モデルのコーヒーを飲んでいて、V 空間の水守市にある路地裏のカフェの一室だった。アバターに違和感のないその所作は、現実世界で似たような格好をしていることを思わせた。

母の故郷であるこの町は、現実では見たことがないが、鼠にとっては勝手知ったる場所だった。

「私のことは 獺^{かわうそ} と呼んでくれ」

「てめーの名前なんざ興味ねえよ。何者だ？ なんで母さんのアカウントを使っている？ 母さんは無事なんだろうな？」

「お母さんは V 空間にアクセスできない場所で休んでもらっている。彼女は少し働きすぎなところがあるからね。息子への贈り物を揃えるために、ずいぶん長時間働いているようだ」

「なんだよ、医者か？」

「いや、そんな人気者ではない。私は、君の同業者だよ」

そう聞いて鼠はああ、と手を叩いた。

「ああ、そうかそうか。OK、わかったぜ。向こうにも俺みたいな密輸業者がいて、俺のシマを奪うために、母さんを人質にして、つぶしに来たってわけか」

「密輸？ そうか、君は自分の仕事を、密輸だと思っているわけか」

「そりゃそうだろ。店長にいつも言われてるぜ、ルールを破るなって」

「ふむ。どうやら君は、根本的な誤解をしているようだな。いや、させられているというべきか」

鼠が反応できずに黙っていると、獺はいつのまにか持っていた紙巻たばこを一息吸って吐いた。V 空間で一定時間黙ると、アバターがそういう動きをするように設定されている。

「鼠くん。君が言っている『ルール』は、浜風市という地域のルールではない。H-mall という店のルールだ。君が H-mall と無関係なところで商売をするのは、違法でもなんでもない」

「……いや、同じことだろ？ H-mall のルールと市のルールって」

「同じではないんだよ」

獺はまっすぐ鼠のほうを見た。獲物を捕らえる肉食獣のような目つきだった。

「君や君のお母さんが生まれるよりも前、そうだな、50 年ほど遡ると、浜風市の H-mall や、水守市の CoopWW は、ひとつの民間企業だったんだよ。君の商売とまったく同じ、住民が必要なものを仕入れて売る、ひとつの小売業者だった。

今と違って、地域にいくつもの企業があって、お互いに競い合っていたことだね」

CoopWW という名前は鼠にも聞き覚えがあった。母の住む町ではそういう名前の企業が市民生活を支えている、と。V空間で話を聞く限り、世界の多くの都市が、起源こそさまざまだが、特定の企業が自治体の役割を担うようになっているという。

「店が複数あれば、客はどうしたって安いほうを選ぶから、店はどうしても価格を下げたい。そのために様々な施策を行っていた。もともと仕入れて売るはずの企業が、自前の生産部門を持ってプライベート・ブランドを展開するとか、そういうことだ。

ところがそんな中、世界中で気候変動が顕在化してCO2の排出規制が高まり、長距離輸送のコストが急増するようになった。そうすると、コストを下げたい店はどこも、商品を地域で生産し、地域内で消費する方向に舵を切ったんだ。中には、住民のほとんどが小売店の社員、もしくは取引業者、なんて地域も増えてきた。

そうやって地域経済がまるごと小売店に取り込まれると、やがて彼らは不満を持つようになった。自分たちの生産や消費で成り立つ経済が、生み出された利益が、どうして自分たちの手元に残らず、東京だのアメリカだのにいる『本社』とやらに持っていかれるのか、とね。

それで、住民たちが金を出し合って、……時には少々荒っぽい手段も使って、地域の店舗を、本社から買い取ってしまった。そして本社からの派遣でない、住民から選ばれた『店長』が、町のあらゆる経済活動、インフラ整備、そして公共サービスを指揮するようになった。

つまり、小売店が町そのものになってしまった、というわけだ」

「年寄りの長話を聞いている暇はねえんだよ。結局、何が言いたいんだ？」

「君のやっていることは密輸ではない、ということだよ。それは、人間社会のあるべき姿、自由経済だ」

「じゅーけーざい？」

はじめて聞く言葉だった。だが鼠には、その言葉が妙に腹に落ちた気がした。常日頃感じていた違和感、薄いベールのように町を覆っている抑圧感を、打ち破ってくれる力があるように思えた。とはいえ鼠は本質的に、そんな抽象的なイメージよりも、目の前の具体的なものを信じる性格であったが。

「俺の商売の名前なんてのはどうだっていいんだよ。それより、なんで母さんをさらったんだ？」

「聞くところによると、君はまだ17歳だからね。未成年との契約には、親の同意が必要だ」

「契約？」

「そうだ。我々は君をビジネス・パートナーに迎えたい。浜風市でH-mallによらない販売網を築いた功績を認めてね。我々はこの2市だけでない、広域の物流ネットワークを、各地の協力者を得て構築している。扱う商品も、君やお母さんが個人で細々とやるよりも、ずっと増える」

獺がクイッと手を動かすと、空中に商品のリストがバツと表示された。

「なんだこの記号。羊？」

リストに書かれた数字を見て鼠は言った。

「円マークだよ。広域ネットワークに使われている、由緒正しい日本の通貨だ。といっても今はV空間のブロックチェーンだが」

獺の言うことがわからないので、鼠はリストを上から見ていった。アルコール類や煙草類。このあたりは鼠も普段から扱っている。

「……この2000円ってのは、浜風市のHポイントでいうといくらなんだ？」

「難しい質問だな。浜風市内でしか流通しないHポイントを、円と取引する市場が存在しないからな。水守市のMizコインと交換するのも、相当な手数料がかかるだろう？」

それは鼠も知っていた。地域の自給自足を守るために、地域通貨の交換には相当な税金がかけられていた。鼠の商売が成立するのは、母と息子という特殊な関係を利用しているからであった。

リストを見ていくと、より高額の商品も並んでいた。貴金属類、宝石類。現実世界でもV空間のアバターのような装飾品を求める者がいる、と鼠は聞いていた。だが化粧品でさえ白い目で見られる浜風市でこんなものを身につけたら、店長に呼び出されるだけでは済みそうにない。

さらに下にいくと、大麻、拳銃、といったものまで並んでいる。

「危なっかしいものを扱ってるじゃねえか」

「H-mallなどの地域を支配する店舗は、敵ながらなかなか優秀でね。自由な経済を取り戻すためには、こういうもので資金を集める必要があるんだよ。必要悪と思ってくれ」

「契約をとるために人攫いをするのも、必要悪ってやつか？」

「確かに我々は、お母さんを不当に束縛している。それは認めよう。だが、それはH-mallも同じではないか？ 君たち市民が本来持っているはずの自由を、地域経済の名の下に束縛しているだろう？」

獺のいう自由、束縛といったものについて思いを巡らせた。確かにそういうものがあるのを、鼠は体感で知っていた。ただ、それは海や風のように世界にただ存在するもので、人間が能動的に変えていくものだとは考えたことがなかった。

「ちょっと考える時間が欲しい。あと、その前にひとつ頼みたい」

「ああ。なんでも言ってくれたまえ」

「母さんは持病があるんだよ。血圧の薬を1日2回飲まなきゃいけねえ。水守市で普通に売ってるやつだ」

獺は黙って鼠を見ていた。

「で、その薬が母さんの家に置いてあるから、届けてくれ。どうせ鍵は開けられるんだろ？」

「……わかった。すぐ部下に手配させよう」

VRゴーグルを外した。やはり目の周りが痒い。

「隼。聞いたか？」

鼠がすぐ隣に座る隼に話しかけた。

「やっぱり母さんを攫ってやがった！ ろくでもない連中だな。現実でもこっちに来ておいて正解だった」

「わかってるよ。この距離で叫ばないでよ」

隼はそう答えた。2人は物流車の座席に座っていた。H-mallの物流部門に申請して借りてきた4トントラックだった。もともと運転手の必要ない自動運転車両のため、座席は一応あるものの狭い。浜風市を出発して1時間半が過ぎ、水守市の市街地が見えてきた。

「今からやつの手下が、母さんの家に行く。目的地をそっちに設定してくれ。で、そいつが出てきたら追跡。母さんを助ける」

隼は車両のコンソール画面を開いて、目的地を設定した。自動運転のためハンドルやアクセルはないが、目的地などは手動で設定することができる。

「だいたい、なんで僕を連れてきたんだ？」

「俺に車の操作がわかると思うか？」と鼠は隼を見下ろして言った。「安心しろ、猫のやつの薬代は、これでチャラにしてやる」

「いや、普通に払えるんだけど……」

-6-

浜風市と水守市を結ぶ道路は、かつては整備された幹線道路だったが、両市が自給自足的な体制を確立すると、あとは週に数度の無人流車を通るのみとなり、

ほとんど整備もされずに放置されていた。あちこちにヒビ割れや落石が生じている。物流車はそれらを避けて、ゆるゆると蛇行していく。

「大丈夫なの？ お母さんは」

と隼が尋ねた。CoopWW の地下倉庫にいた母を、警備交代の間をついて助け出し、物流車に乗って浜風市に戻るところだった。

V 空間で毎日のように話していたのに、現実で目にするのは 8 年ぶりだった。相変わらずその手からは、あの化粧品と魚の交じった不思議な臭いがしていた。鼠は目の奥が熱くなるような気がしたが、2 人でも狭い物流車の座席にさらに母親を詰め込んでいるわけだから、ここで感情を表に出している余裕はない。

「ああ。薬で眠ってるだけだ」

と、静かに答えた。吐息で曇っているコンソールには、「浜風市 H-mall 本店 駐車場」と自動運転の目的地が書かれている。

「で、これからどうするの？」

「父さんに事情を説明して、しばらく浜風市に住んでもらう。あっちなら連中の手も届かねえだろうし」

少なくとも、自分を勧誘してきたということは、市内にツテはないはずだった。

「それはいいけど、追ってきてるみたいだよ。3 台」

隼に言われ、咄嗟にバックミラーを見ると、同じような物流車両が砂煙を上げて、こちらに向かってきていた。

都市間の物流車は週に数本しか出ないので、このタイミングで走り出すのは、獺の部下でしかありえない。そしてその車は、見る間に距離を詰めてきている。

「おい、あいつらの方が速いぞ！」

「物流車は 50 キロが上限だよ。ああ、あっちは 70 キロ出てるね。水守市のほうが広いから、規制が違うんだろうね」

隼は目視で速度を測って言った。

「へー、さすがレーサーだな。って、もうちょっと慌てろよ！ 捕まったら何やらかすかわからねえ連中だぞ！」

「……いや、君とお母さんが捕まっても、僕は帰してもらえるでしょ。もともと無関係なんだし」

「あのな、俺は浜風市を守るためにやったんだぞ？ 助けろよ！」

「といっても、君は、あいつらの同業者なんですよ？」

「全然違えよ！ 俺は皆が欲しいものを手に入れるために商売をやってるんだ。あいつらは町を乗っ取るためにやってる。俺のほうが正しい！」

鼠はまっすぐに隼を見て言った。

「わかったわかった。揺らさないでよ、狭いんだから」

「うわあ、追いつかれる追いつかれる！ なんとかしろ隼！」

隼ははあとため息をついて、それから自分のカバンをごそごとと漁った。

「こないだ工業部門の人から聞いたんだけど、物流車両の上限 50 キロってというのはあくまで、自動運転ソフトウェア内の上限なんだよ」

「……つまり？」

「OFF にすれば、もっと速い」

そう言いながら隼は、車のコンソールを起動して、自分の VR コントローラーを車に接続した。両手にコントローラーを持って、目を閉じてすうーっ、はーと深呼吸をした。

「あ、あのさ、いちおう聞くけど、V 空間でなくて現実の車、やったことあんのか？」

「ないけど、操作は確か一緒だよ」

隼は目をつぶったまま答えた。

「じ、自信のほどは？」

「普段はもっと酷い路面とか、嵐とか、地震の中を走ったりしてるけど……そりゃ不安だよ」

と言った瞬間、座席にぐっと体を押しつけられた。全身に何かがのしかかってきたような圧力がかかり、視界がぎゅっと狭まった。苦しさに耐えながらろうじて目に入った速度メーターは、すでに 100 キロを超えていた。

「こんな遅いの久々だから、感覚がバグる」

という声は鼠の耳には届かなかった。後続にいた車両は、もう砂煙の向こうに消えていた。

「鼠、君は店長を目指しなよ」

自動運転に戻した後、隼はコントローラーを手放してぼつりつつぶやいた。変な姿勢で車に詰め込まれた母は、相変わらず静かな寝息を立てている。

「はあ？」

鼠は答えた。慣れないスピードに当てられて、まだ心臓が激しく鳴っていた。「君は向いてるよ。町の皆に何が必要かを、ずっと考えてるのが仕事だから。僕はよく店長と話すからわかる」

「……ああ、そうか。店長になっちまえば、店長に怒られずに、皆の欲しいものが揃えられるのか」

「うん。で、猫の医薬品を、市内で生産してほしい。薬を手に入れるたびに、こんな騒ぎに巻き込まれるのはまっぴらだよ」

「あー、考えとくわ」

バッテリー残量低下のアラートが出たのは、すでに浜風市が見えてきた頃だった。鼠の父が働く農場と、その向こうに住宅の並ぶ市街地が見えた。遥か遠くに風車がそびえる水平線には、ちょうど夕日が沈んでいるところだった。